

挑戦する機会に満ちた茨木高校

京都大学文学部 2 回生
茨木高校 7 1 期卒業生

茨木高校の魅力について考えていたとき、あるエッセイに出会いました。糸井重里という人のエッセイです。「会社にせよ個人にせよ、できないという現状の分析がまず大切である。そして、そのできなさを抱えたまま、その中でどうするかを考え前進していくことがより大切である。」と彼は言っています。まず、自分は何ができて何ができないのかを理解する。このことが重要です。しかしそこで自分の足りない点の分析に終始してしまっはいけない。足りない中でどうやっていくのか、それを考え実践し前進していくことが大事なことであり、それが最も成長につながる。

私が彼のエッセイに心を打たれたのは、この姿勢が茨木高校での生活と重なる場所があったからです。茨木高校の魅力は自分の能力、実力をはるかに凌駕するような難題、壁に挑む機会に満ちていることにあります。生徒主体で運営される行事や大学と連携した学習プログラムなど茨木高校はさまざまな挑戦の機会に満ちています。これらの機会は、誤解を恐れず言い換えるならば、自分の能力より高度なものが求められる、「できない」を直視する経験です。茨木高校では様々な機会に触れることで自分の「できない」と向き合うことができます。

私の高校時代のそういった経験のひとつとして、最も印象に残っているのは高校三年生の時の体育祭の幹部としての経験です。茨木高校はいわゆる進学校の中では珍しく9月に体育祭を開催します。受験を控えた三年生が主体となってひと夏をかけて体育祭を作り上げるのです。私は黒団の応援団長でした。応援団は三学年合わせて50人以上からなり、二分半の演舞を披露します。私は応援団長として夏の3、4か月をその完成に費やしました。多くの人数からなる集団をまとめ、作品を作り上げていくというのは私にとって初めての経験であり、またかなり厳しい体験でした。周りの人に比べて自分にはリーダーシップがないのではないか。フリの制作やその日の練習の組み立て、応援団長間の会議など日々降りかかってくる仕事を冷静に整理し実行できるようなキャパシティが自分にはないのではないか。体育祭に向けて活動するなかで自分にはできない部分、至らない部分を発見し、それと向き合うことになりました。こういう発見は実際に難題に挑んでからでないとしづらいものです。この経験を通じて自分の能力がどのくらいであるかを初めてちゃんと知ることができました。

しかし、ここまでであればただ苦しんだというだけで何にもなりません。糸井さんのエッセイでいえばまだ第一段階です。茨木高校はさらにその次の経験をさせてくれるところにその本当の魅力があると私は思います。つまり、苦しみながら自分の実力を超えた難題に挑

む生徒をサポートし、それでもゴールまで進んでいく手助けをしてくれるのが茨木高校であると私は思うのです。体育祭の応援団長として実力を超えた難題にひいひい言っていた私が、それでも前進していくことができたのは毎年生徒を支えてきた先生方が親身に相談に乗ってくださったり、茨木高校愛にあふれた先輩方がアドバイスをしてくださったからです。苦しくてもそこから逃げたり、やめてしまいたくなったりはしない。自分の能力が足りないからといって止まってしまわないのは、ひとえにその挑戦する生徒を全面的にサポートする体制が茨木高校には備わっているからだと思います。そうやって自分の実力と向き合いながらもそれ以上の難題に挑戦する経験の中で、自分自身が次第に成長していく。そういう経験を僕は何度もしました。その経験こそが茨木高校が与えてくれる最大のものであると振り返って思います

勉強面についても同じです。私は茨木高校が与えてくれた京都大学との連携プログラムに参加し、京都大学に入りたいという自分の実力を凌駕するような目標に出会うことができました。そしていざ挑戦するという段になれば茨木高校はさまざまにサポートしてくれました。先生方の授業内、授業外での厚いサポートのおかげで、目標に向かって前進を続けそれを達成することができたのだと思います。

このように茨木高校にははるかに高い壁や目標に出会い挑戦する機会と、それに対するバックアップが厚く保障されています。茨木高校に通い、様々な難題に挑んだことで大きく成長できたと私は思います。そして挑戦をするにあたって背中を押しサポートしてくれた方々にとっても感謝しています。いま受験を控え、志望校に迷っている方がいるのであれば私のこの経験を参考にいただければ嬉しいです。